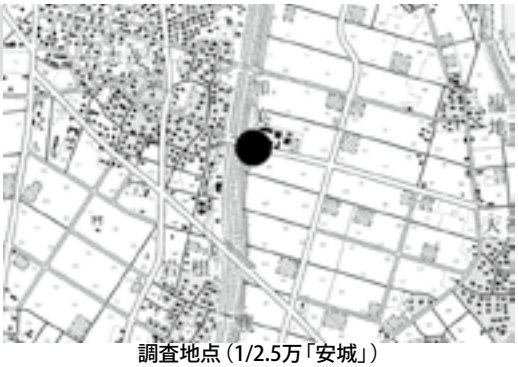
下懸（しもかけ）遺跡


調査地点（1/2.5万「安城」）

所　在　地　安城市小川町向田
（北緯34度54分27秒 東経137度05分43秒）

調査理由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調査期間　平成27年11月～12月

調査面積　280㎡

担　当　者　松田 訓

調査の経過　調査は、愛知県建設部による中小河川改良事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成27年11月から12月にかけて実施した。調査面積は、280㎡である。

立地と環境　遺跡は安城市東部に所在し、矢作川とその支流によって形成された沖積地上に立地する。調査区は碧海台地縁辺部に位置し、東側は矢作川沿いの低地が広がっている。下懸遺跡は、今回の調査地点の南側にて、弥生時代中期～古墳時代前期を主体とした遺物、遺構がこれまでの調査で確認され、集落の存在も明らかになっている。本調査区は、下懸遺跡の北端に位置する。調査地点の北側には、鹿乗川沿いの低地に弥生時代後期～古墳時代前期の墓域、集落を主体とした寄島遺跡が展開する。遺構の検出高は、標高約7m前後を測る。

調査の概要　今回の調査では、下面から古墳時代前期の竪穴建物、古代の溝、上面から近世の水田等が確認された。この中で竪穴建物の可能性が考えられる遺構は、1基検出された。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、部分的な検出であるため、全形を把握できていない。床面が貼られたと思われる層の下位では、幅の広い溝が平面プランに沿うように設けられていた。床面と考えられる層の直上では炭化材が広がっていて、焼失家屋の可能性も考えられる。遺物は、古墳時代の前葉と考えられる土器が出土している。この竪穴建物跡を切って、幅約1mの溝が検出された。東西方向に走るこの溝からは、土器片とともに平安時代と考えられる灰釉陶器が出土している。上面で確認された水田は、大畦から小規模の区画で小畔が設けられていた。下面の下位では、調査区全体に自然流路が確認され、古墳時代初頭の遺物が確認されたため、調査地点はこの時期の直後に陸化したと推測される。今後、台地縁辺部での土地利用の仕方などが、検討課題となるであろう。（松田 訓）

調査区全景（西から）

竪穴建物跡と溝（西から）